

志賀高原に生息するニホンザルの糞による食性分析

斎藤良裕

志賀高原に生息するニホンザルの食性を、糞の内容分析により明らかにするため糞と標本の採集を行ってきた。

雑魚川流域での採食状況を中心に、これまでの志賀高原の調査で採食がよく観察された、コシアブラ、ブナ、ツリバナ、ヒロハノツリバナ、アオダモ、ミズメ、ホオノキ、シナノキ等の樹種について、木質部と樹皮部の標本作製した。

採集した糞の一部を洗浄し、木質繊維、冬芽、ササ、樹皮に選別し冬芽の利用度を検討中である。また、選別した木質繊維を、樹脂包埋して、切片を作製した。

日本ザルの餌の栄養素の分析と適応機序の解明

江澤郁子（日本女子大・食物学科）

志賀高原に生息する日本ザルの餌は、春夏秋冬において、それぞれ種類も多く、また供給される餌は、その時期によりいちじるしく異なる。とくに冬期に寒冷、積雪地帯に住む日本ザルは、その生活に必要な熱量を摂取することは著しく困難であり、到底消費熱量に及ばないと予想される。そのため秋に栄養価の高い食物を多量にとり、栄養分を皮下脂肪その他の形で体内に蓄積することが推定される。

本年度は、とくに日本ザルの春の餌（葉、芽、花など）について成分分析を行い、昨年度の冬芽、秋の実の成分との比較を行った。

その結果、春の餌（葉、芽）は、秋の実に比べ蛋白質が多く、蛋白質の豊富な冬芽に近い含有量を示した。一方、糖質については、秋の実、冬芽に比べ、概して少く、脂質もまた同様に少い傾向を示した。

以上の分析結果から、冬芽は供給量が少いとはいえ、その栄養素は濃縮されたものであり、とくに蛋白質が他の時期の餌に比べ豊富であることは、その特異動的作用からも、冬期における日本ザルの主要な熱量源となっていることが示唆される。

ゲラダヒヒの消化率に関する実験

岩本俊孝（宮崎大・教育）

禾本科の葉を主食とするゲラダヒヒは、その餌や繊維素をどの程度消化しているのかを知ることが、この実験の目的であった。一頭の成体雌（9.4 kg）を対象とした実験を1981年7月26日～8月11日の間に、霊長研の飼育舎内で行なった。しかし、当初の計画であった野外から刈ってきた禾本科の葉への餌付けは、不成功に終わった。そのため、実験期間の途中より、餌を平常の飼育時に与えているMP（モンキーベレット）とキャベツに変えた。そして、その際の各栄養分の消化率を測定することによって、イネ科植物の葉の消化率を推定するという手続きをとった。消化率を算定するための栄養分析では、初期の禾本科植物給餌の影響が全くなかった8月5日～8月10日までの6日分の試料（餌・糞）を使用した。毎日の摂食乾重量はキャベツ15g、MP 110gであり日変動はほとんどなかったが、脱糞量は1g～30g/日と大きくふれた（平均14g）。この6日分の試料から推定した消化率は、乾重88%、カロリー91%、蛋白質91%、脂質88%、繊維素54%、可溶性糖質94%、灰分27%という高い値であった。野生の食性を考えるとこの繊維素の高い消化率は興味ある結果であるが、ゲラダヒヒの消化管の形状からすると、多少問題を含んでいる。この種は、発酵用に特殊化した複数胃をもつわけではないし、盲腸・結腸も他のPapio属の種と比べてそれ程特殊化しているわけではない（Osman Hill, 1970）。それ故、この結果の解釈としては、Papio属もゲラダヒヒ同様ある程度繊維素を盲腸・結腸あたりで消化できるか、ゲラダヒヒのみが特殊な発酵微生物をその部分に養っているかのいずれかとなるだろうが、結論を下すには、完全に禾本科食に慣らした状態での消化率の実験がどうしても必要のようである。なお、禾本科の葉の栄養組成（セミアンの9月の試料）をもとにして計算した禾本科の葉の乾重消化率は79%と高い値となった。